

(様式3)

県立高校改革（I期）指定事業 実施報告書（平成28年度）

学校名	七里ガ浜 高等学校（全）	校長名	有森 斉
指定事業	授業力向上推進重点校		
研究主題	生徒の思考力・判断力・表現力を伸ばすことを目的とした組織的な授業改善により、学校全体の授業力を向上させることで、基礎的・基本的な知識・技能の取得を図り、学習に対する関心・意欲を高め、生徒の自己実現に資する学力の向上を図る。		
3年間の目標	○ すべての授業を「脳働学習」と位置づけ、生徒の深い思考力、的確な判断力及び豊かな表現力を育む学習を展開する。 ○ 教職員が学習指導力を高めるだけでなく、生徒自身が学習に取り組む力を向上させることで、教職員も生徒も学び合う学習共空間を醸成する。 ○ 生徒会行事や部活動等の生徒の自主活動を学習活動の基盤と位置づけ、主体的に活動する姿勢や、困難や逆境に打ち勝つ精神力、チームで働くことや他者に対する寛容さなどを身につけさせる。		
本年度の研究内容	<p>(1) 目標</p> <p>① 「生徒に身に付けさせたい力」の策定と共有 生徒の実態、生徒や保護者のニーズ、地域等が求める生徒像を明確化し、職員のみならず、生徒や保護者の間で共有し、取組に対するモチベーションを持たせる。</p> <p>② 「思考力・判断力・表現力」に係る評価を主眼とした単元指導についての研究 各教科・科目において「考察し・表現する」ことを踏まえた授業実践を行い、教科において共有し、実績を蓄積する。</p> <p>(2) 実施内容（具体的に）</p> <p><目標①について> 授業担当者から思考力・判断力・表現力の育成を目指した取組であることを生徒に理解させ、意識的な取組を促した。また、機会あるごとに保護者への周知と理解を図った。</p> <p><目標②について></p> <p>○ すべての授業を「脳働学習」とすることを目標に、各授業担当者が50分の授業時間内に、生徒が「脳を働かせる」時間を設け学習指導を実践した。</p> <p>○ 研修会の実施</p> <ul style="list-style-type: none">・ 夏季休業期間中などに行われた各種研修会に参加した教員が講師となって、新たな学力観に基づく授業改善に係る校内研修を実施した。・ 河合塾で新たな教育課程について研究をしている方を講師に招いて校内研修会を行い、いま求められている学力観について職員全員で共有を図った。・ 小グループでの合意形成ワークの手法を取り入れた人権研修「教職員のモラリティ」を、副校長が講師となって実施し、各教員に「脳働」を体験してもらった。 <p>○ 校内での相互授業見学週間の実施</p> <p>秋の授業観察期間に合わせて相互授業見学週間を設け、同一教科及び他教科での相互授業見学により他の教員の授業を参観しながら、生徒の学習活動を客観的に捉え直して自分の学習指導へ資するようにした。</p> <p>○ 生徒による授業評価のフィードバック方法の検討</p> <p>授業時間内における生徒の思考の過程を計るための手法として、授業終了前に行うフィードバックについて、有効な手立てを探ることをはじめた。各教科担当それぞれが行っている内容を収集して、学校として基本フォームを定めるようにしていきたい。</p> <p>○ スタディサプリの活用</p> <p>1学年生徒全員にスタディサプリのアカウントが付与されたことにもない、本校独自の「セブンスタイム」（週2回行われる7校時の自学自習時間）での活用を検討した。しかし、WiFiへのアクセスが公用PCに限られること及び学校のタブレット数に限りがあることにより、「セブンスタイム」内での活用は進まなかった。自宅等で、自分のPCを用いて積極的に活用している生徒もいることから、1学年の担任を中心に、スタディサプリアプリで宿題を課すなどしているが、多くの生徒はなかなか家庭学習に割く時間的余裕がない状況にある。</p>		

	<p>(3) 検証方法と検証結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 校内の研究授業及び研究成果発表会において発表した『生物』の単元「刺激に対する反応」において、まず生徒自身が反応の仕組みを理解し、その後にグループで協働して実験の手立てを考察・共有させた。加えて他のグループによる自分たちとは異なった手立ても共有させた。その後、各グループで考案した実験方法により実証を行わせ、最後に考察を行わせた。その結果、実験の成功・失敗に関わらず、生徒たちは自分の班の結果についてなぜそうなったのかを深く思考することができていた。また、自班だけでなく、他班の結果を踏まえて、より深い考察を行うことができた班もあった。 ○ 授業後の生徒の振り返りから、生徒が主体的に「脳働」に取組み、自然と「深い学び」を行っていたことが伺えた。 <ul style="list-style-type: none"> ＜生徒の記述から＞ <ul style="list-style-type: none"> ・今まで、学んできた知識をいかして実験の手立てを考えることができた。 ・班で話し合っ考えるのは楽しく、事前に予想を立てるのはとても面白かった。 ・自分の班と他の班とではやり方が違っていたので、どれがうまくいくのか楽しみだった。 ・考えた予想を実際に実験して、自分の考えを実現できるのは楽しかった。もっと様々な方法を試してみたかった。 ・予想した方法ではうまくいかなかったが、なぜうまくいかなかったのかを考えるのが楽しかった。 ・いままでは、先生の話の聞いているだけの受身だったが、今回は自分たちで教科書を読み進めた上で先生の話の聞いて、理解を深めることができた。 ・実験では、物事がなぜ起こるのかを発想する力を身につけることができたと感じた。 ○ 生徒の感想からは、自分だけではどのようにしたらいいのかわからなかった者も、自分の知識をもとに協働して共有することにより、「集合知」で仮説を実証することの醍醐味を味わえたことが伺える。また、自分の班だけでなく他の班の意見をふまえることで、物事を多面的に捉えることの意義にも気づいている。そしてそのことで、確実に生徒自身の興味・関心は高まり、結果として主体的に学ぶ姿勢を涵養することもできたと思う。
<p style="text-align: center;">研究の まとめ</p>	<p>(1) 成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 教員の多くは、何か特別の授業を行わなくてはならないという思いから、忌避感を持つ者もいた。よって、本年度の研究においては、決して特別な学習指導を行うのではなく、日常の学習指導の切り口を少し変えてみて、そこに「主体的・対話的で深い学び」の味付けを少しふりかけることで、生徒の「脳」が活性化し、生徒自身も意識することなくいつの間にか主体的に学ぶ姿勢を身につけているということが可能なのではないかという想定で、ひとつの授業づくりについて実践し研究することとした。 ○ 若手教員を中心として、意識的に生徒に「深い思考」を促す取組が広がってきている。学習指導では、多くの授業でグループワークを取り入れるようになり、生徒が積極的・主体的に学習を行う姿が見られるようになった。また、定期試験の作問においても工夫が凝らされ、「～という解答になる設問を作りなさい。」といった、試験時間内においても「脳働」を促す問が出題されるなど、生徒に「深い思考」をさせるようになった。 ○ こういった「脳働」の取組を継続することで、指標である思考力・判断力・表現力等を高めることができたと思う生徒の割合を90%以上とすることも不可能ではないと考える。 <p>(2) 課題（次年度に向けての方向性を含む）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒にとっては、目先の大学受験をいかにクリアするかが大きな課題となっていて、その手前にあるはずの「学ぶ意欲」はとかく脇に置かれがちであった。それは教員も同様で、生徒の進路希望をかなえることが主となってしまうと、正解を導く解法の学習指導に陥りがちであった。 しかし、今回の研究成果から、一見遠回りのように見える、仮説を立ててそこから実証していくという「深い思考」を促す工夫をすることが、生徒の学習に対する興味・関心や学ぶ意欲を高めることに繋がることを意識できた。 ○ 大学入学後の研究活動はもちろん、その後に社会に出てからも、物事に「協働」して当たる場面は多い。その際には、正解のない問いに対して、どこまでチームで納得できる「納得解」を導けるかが問われる。よって、高校の学習活動で、他と協働した「集合知」による仮説を実

	<p>証する経験を積ませることは、その後の人生において大きな意義があると考え。答えのない問いに対して、「協働」して物事にあたり、みなが共有できる「最高の妥協点」を導き、それをもとに周囲をネゴシエートできる力こそが、究極的には「生徒に身に付けさせたい力」であることを改めて感じた。</p> <p>○ 今年度の目標であった「思考力・判断力・表現力」に係る評価を主眼とした単元指導というレベルまでは、本年度は到達することができなかったので、次年度の研究においては、本年度の取組みをふまえ次のように研究を進めたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「脳働と協働」をメインテーマとして、生徒がそれまでに学んだ知識をいかしながら、グループワーク等を通して周囲と協力して「深い思考」を行うことをより発展させていく。 ・ 評価方法については、授業（もしくは単元）の最後に振り返りを行い、授業前と授業後での理解の差（「なにが分かったか・分かるようになったか」）を基にして、評価をしていく方法について研究する。 ・ 以上の研究内容について、学校HPなどで情報発信していく。
<p>その他 特記事項</p>	